校長室だより～燦燦～ №３６６

古畑任三郎

2021.6.1

古畑任三郎と言われると、懐かしく感じる方が多いのではなかろうか。今の中学生は、わからないだろう。この役を演じていたのが、名優、田村正和さんである。先月、亡くなられた。そういえば、テレビで田村さんの姿を見なくなって久しい。

追悼番組として、久しぶりに「古畑任三郎」を見た。過去のインタビュー場面も見た。初めて、「古畑任三郎」を見たときは、「刑事コロンボ」に似ていると思ったものである。「刑事コロンボ」に反応してくださる方は、私と同世代か、もう少し上の世代の方であろう。

田村さんは、「古畑任三郎」の中で、よくものまねされるような演技をしている。まさしく役者である。あの番組は、ストーリー展開のよさはベースにあるが、田村さんの演技によるところが大きい。また、他のドラマでは主役を演じるような有名俳優が、毎回犯人役として登場することもおもしろかった。

田村さんが、インタビューの中で、こんなことをおっしゃっていた。「古畑任三郎を違う人が演じたらどうなるのだろう。こうじゃないかと、いつも思っていました」「脚本を読んだときの感動を、そのまま伝えようとして演じていました」こうもおっしゃっていた。「もう、満足したらおしまいですから」

名優というのは、自分の演技に少しも満足していない。もっと上を、もっといいものをと考えているのだろう。これは、俳優に限ったことではない。あらゆる職業に通じることだろう。

さて、国語の話になるが、教科書がかわると、新教材といわれる今までは教科書に載っていなかったものが入ってくる。楽しみにしながら、それを読む。「何だこれ。何で教科書に入っているんだ」と思ってしまう教材もある。「自分に読む力がないのか。ということは、生徒も読めないのではないか」その教材の価値や作者のメッセージがわからないのである。

「これで授業をしなければならないのだから、これではまずい」と、もう一度読んでみる。すると、見えてくるものがある。「ああ、そういうことか」また、読んでみる。「んん、いい教材かもしれない」とわかってくる。

一度読んで、最初からわかってしまう作品がいいわけではない。一度読んだだけでは、よくわからないような作品の方が教材としていいのかもしれない。教材としての価値の問題である。国語の授業をしていたときには、教材に対して印象の良し悪しはあったとしても、繰り返し読み込んでから授業をするようにしていた。何度も読んでいくと、もうすっかり教材の魅力に取りつかれている。その頃には、この作品が教材として教科書に載る理由も見えてくる。

また、ずっと昔から教科書に載っている定番教材がある。１年生なら「少年の日の思い出」２年生なら「走れメロス」３年生なら「故郷」である。「いつまで教科書に載っているんだ」という方もいるかもしれない。だが、これにも理由がある。これらの教材は、毎年、何回読んでも、新たな発見をさせてもらえる。「あれっ、何で今まで気づかなかったんだ」不思議である。これが作品の魅力であり、教材として価値なのだろうか。

教師は、「四者悟入」が大切である。四者とは、役者、学者、医者、易者のことである。このうち役者としては、生徒を惹きつける魅力が必要である。田村さんは、最初に脚本を読んだ感動を伝えようとした。国語の教師は、自分が作品を読んだ感動や教材としての作品の魅力を生徒に伝えなければならない。正確に言えば、直接、言葉で伝えるのではなく、授業を通して、生徒がそのことに気づくようにもっていくのである。

田村正和さんのような役者さんは、なかなか出てこないだろう。田村さんは亡くなっても、作品は残る。「古畑任三郎」は映像としていつまでも残る。教師の仕事も、生徒の中にずっと残るはずである。